

極めて私事にわたることながら、六月に博士論文を提出した。素材は『牧民忠告』『牧民心鑑』という民政書である。八年ほど前、修士課程に進んだとき、よもや自分が書物を題材に博士論文を書くことになろうとは予想だにできなかった。そのころ、近世史では書物研究という分野は、まだ生まれだてのホヤホヤという感じで、非常に新鮮ではあったが、ジャンルとして確立していなかった。

「書物出版と社会変容」研究会は四年ほど前の、二〇〇三年八月二日に発足した。研究会の回数は、すでに三〇回を越えている。各会の報告者は二〜三名、出席者はほぼ三〇名弱であるから、報告本数は七〇本を越え、出席者数は延べ人数にすると一〇〇〇人近い。現在では、書物研究は学際的な研究成果を挙げており、

この研究会から生まれた本誌も第三号を迎えることになった。振り返ってみると、感慨深いものがある。

第一号は、表紙のデザインをはじめ、目次、誌面の文字組など、フォーマットを作成するのに試行錯誤した。A5判はコンパクトで、収録、持ち運びには都合がよいが、どうしても文字が小さくなる。できるだけ文字を大きくして、読みやすくするために、書体・行間などを何度となく変えた。

苦心した一号だが、「頁が開きにくい」という苦言をいただいた。それを本の厚さのせいだとばかり思っていたが、懇親会の場で、その話をしていると、浅岡邦雄氏が即座に、「それは、ヨコ目だからですよ」とおっしゃった。用紙には漉き方により、ヨコ目とタテ目があり、紙の目がタテ方向でない、そういうトラブルが起こると言う。

確かに第一号の「ノド」（綴じ込み部分）はヨコに波打っている。そこで、第二号では、印刷所に「タテ目の紙を使用してください」と注文を出してみたところ、なるほど、開きやすくなった。浅岡氏のご教示がなければ同じ轍を踏んでいたところである。

本誌はアプリケーションソフト「一太郎」で文字組をしている。作業を通して、「一太郎」の機能に習熟し、「百太郎」ぐらいに使いこなせるようになり、一号の欠点を補い二号に活かしたつもりであった。しかし、なお改善の余地はあり、本号では、本文の文字を○・三ポイント大きくしている。

今後、四号、五号の続刊が予定されている。ようやく編集に慣れてきたところなので、是非ともご投稿いただき、一号でも多く刊行できればと願っている。

(小川記)